



Title	自己意識的感情の社会生態学的基盤：関係流動性の役割 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	前田, 友吾
Citation	北海道大学. 博士(人間科学) 甲第15988号
Issue Date	2024-03-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/92342
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Yugo_Maeda_review.pdf (審査の要旨)



[Instructions for use](#)

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（人間科学）

氏名： 前 田 友 吾

主査 教授 結 城 雅 樹
審査委員 副査 准教授 瀧 本 彩 加
副査 講 師 平 松 誠

学位論文題名

自己意識的感情の社会生態学的基盤—関係流動性の役割—

・当該研究領域における本論文の研究成果

当論文の特筆すべき研究成果として、以下の3点を挙げる。

第1は、社会心理学や進化心理学、また感情心理学など、人間の社会的感情を対象とする諸研究分野に対する貢献である。これらの領域で近年隆盛してきた社会的感情の適応論的分析は、誇り・羞恥・恥・罪悪感などの自己意識的感情（self-conscious emotions）が、当該個人がおかれた社会的環境に内包された様々な適応課題の解決機能を持つことを明らかにしてきた。しかし、これらの先行研究では、社会環境の性質の違いが、そこに暮らす人々の自己意識的感情を左右する可能性の検討が不足していた。それに対し本研究は、近年注目を浴びている社会生態学的要因である関係流動性（relational mobility）が、成功時に経験されやすい自己意識的感情を左右している可能性に焦点を当てた。対人関係の選択の自由度が高い高関係流動性社会に暮らす人々にとっては、ポジティブな社会的評判を獲得することの適応価値が高く、そのことが成功時の誇りの経験しやすさにつながっている。一方、対人関係が固定的で選択の自由度が低い低関係流動性社会に暮らす人々にとっては、ネガティブな社会的評判を回避することの適応価値が高く、そのことが成功時の羞恥の経験しやすさにつながっている。7件の国際比較研究の結果は、この理論仮説の妥当性を示した。このように、本研究は、感情の適応機能に関する理論と社会環境の多様性の理論とを融合させる斬新な発想により、自己意識的感情研究に新たな地平を切り開いたといえる。

第2は、文化心理学を始めとする人間の心理の多様性とその原因を扱う諸研究領域に対する貢献である。自己意識的感情の文化差に関する先行研究は、成功時の誇りと羞恥の文化差の原因を、「相互独立的自己」対「相互協調的自己」という、よく知られた文化次元で解釈しようとしていた。しかしこの理論の問題点は、特に誇りを、対人関係を軽視する「脱関与的」で孤立主義的な感情であるかのように見なしてきた点であった。あらゆる人間は社会的存在であり、他者との関わり抜きに生きることはできない。成功時の誇りと羞恥が、それぞれ異なる性質を持つ社会環境の下で、様相の異なる社会的相互作用を通じつつも、いずれも望ましい対人関係の獲得と維持に寄与する可能性を示した本研究は、文化心理学や社会心理学における、旧来の「個人か社会か」という単純な二分法に重大な疑義を投げかけるものである。

第3は、実社会への応用的な貢献である。本研究の結果は、同じ成功状況においても、周囲の人々との関係性が異なる環境下では、異なる感情が経験されやすいことを示している。このことは、特定の環境で効果を発揮した教育・指導方針が、他の環境には単純に適用できない可能性を示唆している。たとえば現在、様々な教育や労働の現場で、「褒める教育」や「褒める指導」の重要性が叫ばれている。しかし、本研究の結果を考慮すると、第三者が存在する公的場面で誰かを称賛することは、高関係流動的な社会環境では成功への動機付けにポジティブな効果をもたらす一方で、低関係流動的な社会環境では羞恥などのネガティブ感情を引き起こし、逆に成功に向けた行動を抑制してしまう可能性がある。このような考察は、今後の学校教育や企業における人材育成などを検討する際に参考になるであろう。

・学位授与に関する委員会の所見

以上詳述した当該領域に対する貢献の大きさに加え、本論文は、論文としての全体的な質も高く評価

される。文章は論理的で整然としており、背景情報が適切に整理された上での確な問題提起がなされ、研究の重要性や独自性が明確に表現されている。結果の解釈や今後に向けた展望も明快で、妥当なものが示されている。

上記の学術的価値を高く評価した一方で、審査委員会では、いくつかの課題が指摘された。例えば、予想外の研究結果について解釈を深めること、標本の代表性の偏りが結果に影響した可能性の議論が必要であること、理論のオリジナリティをさらに強調すべきであることなどの意見が出された。しかしこれらの問題は、申請者が今後さらに研鑽を積み重ねる中で解決されるべきものであり、上述の卓越した学術的意義を損ねるものではない。

以上を総合的に評価し、本委員会は全員一致で、前田友吾氏に博士（人間科学）の学位を授与することがふさわしいとの結論に達した。